おまいら助けてくれないか？ってスレ立ててみた

彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おまいら助けてくれないか？ってスレ立ててみた

【Ｎコード】
Ｎ５１３１Ｙ

【作者名】
彩

【あらすじ】
『なんか異世界っぽい所に拉致られて帰れないんだけど、おまいら助けて』そう掲示板に書き込まれた事から全てが始まった。暇に任せてそのスレッドに係わった男とそのスレを立てた主婦の異世界拉致物語。短編「おまいら助けてくれないか？」の続編。
短編を読んでいないと全く理解不明ですのでお気を付け下さい。暇つぶし程度のノリで基本短文でサクサク進めていきたいと思っています。

ネットは無力で有力

ピッ　と音を立てて目の前に出ていたゲームのメニュー画面としか思えないウィンドウを手でかき消すように払い、閉じた。椅子に座ったそのままの姿勢で両手で顔を覆い、うな垂れ、大きい溜め息を一つこぼした。

砂糖なしのカフェオレが飲みたい…。

メニュー画面の隅っこに小さく表示されたＧｏｏｇｌｅのコマンドに気付いたのはついさっきだった。歓喜と興奮で焦る頭でもなんの問題も解決出来ない事が直ぐに導かせられた。

どこに相談する？　警察？　頭がイカれてる狂人扱いで終いだ。こんな非現実的な話をまともに聞いてくれる人なんて「頭がおかしい人」前提で話を聞いて、最後に心の問題や受診を勧めるのがオチだ。

だから、「いつも」遊びにいっていた常駐板に、初めてスレ立てしてみたのがついさっき。

問題解決には至らなくても、抱えた問題を吐きだして返信があるだけで正直嬉しかった。イカれてると思われていてもだ。隠さないで堂々と態度に出された方が自分に起きている現状がイカれてると認識出来て、いっそ心地よかった。

スレを覗いて気付いた日付の衝撃は想像より小さく受け止められた。

ああ、ファンタジーだからなんでもありだろう、そのくらいだった。

スレの雰囲気が「いつも」と同じで本当に時間が経っているのか疑いたくもなったが、同時に検索していた過去の新聞記事閲覧サイトでそれは真実だと判を押された。

ずっと心配だった、咄嗟に突き飛ばしてしまった息子にあの後何もなかったかという懸念は当時の新聞記事に出ていないという事で１５％位安堵できた。でも確実ではない。捨てアドでも取って実家や旦那にコンタクトをとも考えたがアドレスなんか覚えてるはずない。全部、携帯かＰＣの中だ。それに取れたとしても相手にされるはずがない。信じてくれたとして、家族まで「狂人」扱いされてしまう可能性が高い。

結局、八方ふさがり…。

私の世界で助けを求める事は絶望的だ。でも唯一の心のバランスを保つツールにはなった。これは確定だ。

もう一度、手をかざし、ピッと音を立ててメニュー画面を開く。私のステータスを示す場所のＭＰが０になっている。疲れたと思っていたのはＭＰを消費していたからだったんだな～と思いながら、私の中でこの世界はゲームだと固定する事に決めた。

女将さんの呼ぶ声を聞きながら休憩を切りあげるべく、私は椅子から立ち上がった。は～い、と返事をしながらＭＰが回復しても、中途半端に会話を切り上げた自分が立てたスレがまだある事を願った。

私が、同じ世界から、同じスレに係わった人が、同じ世界に拉

致された事実を知るまで、あと少し。

ネットは無力で有力（後書き）

ゆるい執筆者なので読み返し等ゆるいです。誤字脱字ありましたら、お知らせ頂けたら幸いです。

主人公にはなれないし、なりたくもない

「召喚の儀式がされたよ」

宿屋の夕食の喧騒が静まった時刻に、疲れきって神殿務めから帰ってきたレッスがプライベートスペースのダイニングテーブルの椅子に腰をかけると同時に発した言葉。

その発言に私の表情筋が固まるのが分かった。

「……ま…た、拉致…ですか……」

「…そうだね。イシーダからすれば拉致以外のなんでもないね」

絞りだすようにして掠れた私の声に、レッスが暗い表情のまま苦笑した。目線はお互い合う事はない。レッスは手元に運ばれた夕食に、私は何処ともつかない空虚に。

こんなにも重苦しい空気なのは今度も失敗なのだろうか？　思案したと同時にそれは杞憂だったとレッスが答えをくれた。

「儀式は成功。無事に救世主たる勇者様を迎える事が出来た…」

ハッ！　何が勇者だ！　救世主だ！　他力本願の快楽主義共め！！

狂い叫んでしまいたかった。けどもソレを飲み込む。彼はその屑共と同じ神殿に係わる職業だ。神殿兵士。そして私に唯一情けをかけてくれた恩人。そんな彼の前で口に出す言葉ではない。これでも察するという高等スキル保有人種の端くれだ、本当に弁えなくてはいけない時は弁える。レッスは私の無言を受け、歯切れ悪く言葉を続けた。

「…ただ、彼…勇者様が、……自分の前に女が呼び出されていないか、と」

あまり大きくもない自分の目が見開くのが分かった。頭の中でもしかしたら、もしかしたら！　とそれしか繰り返す事が出来ないみたいに連呼する。心が浮き足だしてザワザワして落ち着けない。一刻も早くネットにダイブしたい！　確認したいのだ！　国が、私の世界が、何かしてくれたのだろうか！？

心ここに在らずな私に彼はまだ言葉を続けた。

それはもう呟きに近い位の声音で。

「聖統括様は、その問いに、否、と、答えた」

この部屋の空間が止まった。いや、私と彼の空気が止まったんだろうか。

低学歴m9（^Д^）プギャーと罵られた自分でもわかる。学問と人生経験は別だ。私は失敗作で、その存在を（何故か知っていた？）勇者様が訪ねた。屑野郎（聖統括）は存在を否定した。

導かせられるのは、私の存在は不要。即ち、死、だ。

「神殿はイシーダが生きてる事は薄いと考えている様子だけれど、可能性を0にする為に近日中に捜索隊がつくられる」

ああ、目まぐるしく思考が流れる。体は動かないのに生存本能が死の恐怖に対して生き残れる可能性、行動を模索し始めている。これはゲームでいえばイベントなんだろうか？　逃走イベント？

「…夜が明け次第、ここを、出て…いきますね」

これしか選択肢がない。残ったままではバッドエンドだ。善意で助けてくれたレッスや家族のように接してくれた女将さん、ぶっきらぼうで、でも優しく頭をいつも撫でてくれた旦那さん。この家族に迷惑をかけれない、いや、かけてはいけない。

本音は、どうしたらいい、助けてと、縋りたい。他人任せにして甘えてしまいたい！　私は強くはない！　逃げ出して自分の殻に閉じこもりたい！

それじゃあ、あのクソで屑共と同じ。それだけはまっぴらごめんだ！！

やる事が沢山出来てしまった。自分にあてがわれた部屋に向かう為に後にしたドア越しにレッスが何か呟いたのが微かに耳に届いが、小さすぎて私には聞き取れなかった。

自室に戻って外出用の上着と給金として貰っていたお金（お世話になっているからと断ったがおこずかいと言われて押し切られた）をありったけ持ち出した。この世界は娯楽が少なすぎるので無駄使いは殆どしていない。甘い物くらいしか私には楽しみがないのが悲しい。

女将さんを探してピークの過ぎた受付フロントは寛いで談笑するお客さんがちらほらいる位で私が少し出ても平気そうで安心した。

道具屋に行くと告げれば、朗らかに笑って「気を付けて行くんだよ」と送り出してくれた。

そのセリフと言いように実家の母が重なった。まったく同じ言葉をいつも出かける時にかけられるのだ、２０を過ぎて嫁いでもなお、

その言葉をくれた。

返事をして裏口から出た。私は我慢できずに口を押さえても少しこぼれる声を必死に抑える。

いつか、大声で泣ける場所に私は、還れるのだろうか？

主人公にはなれないし、なりたくもない（後書き）

イシーダ呼びに突っ込み描写を入れたかったんですが折角シリアスっぽいので自重。基本おちゃらけた思考なのでそのうち爆発しそう。

私は日本人だ

小走りで足を進めて、目的の店に急ぐ。案外早く着けば、日が沈みかけているので、道具屋も店じまいの準備をしていた。ｃｌｏｓｅの札などお構いなしに扉を開けて顔馴染み特権で色々買う事が出来た。出掛けるのかと聞いてきたから親戚が危篤と社会人の常套句を述べてみた。実際、私の世界では４０年経っているらしいので親戚はバンバン鬼籍に入っているだろう。泣いたと丸わかりの顔だし丁度いい。後何回でも言える台詞だなと考えて、自分の両親については意識しない様、思考から目を背けた。

只今戻りましたと言いながら宿屋の裏口を開ければ、中が見えないと感じたと同時に、凄い勢いで身体を絞めつけられた。私より大きくて、柔らかい、温かい温度が身体中に伝わる。私はこの感覚に酷似しているモノを知っている。無条件で張り詰めていたものが緩んで泣いてしまいそうだった。必死に耐えようとしたら頭に何かがポツポツと落ちてくる。背中に回っていた温もりが移動して、私の髪を優しく撫でる動きに変わる。

「なんで、あんたばかり、こんな目に、合っちまうんだろうね。ごめんよ、ごめんよ」

女将さんの掠れて水っぽい声が頭上から顔の前から響いた。

その瞬間、もう耐えられなかった。少しだけ、少しだけ、甘えていいだろうか？　誰かに許可を取るわけではないが言い訳まがいなことを思いながら、私に温もりを与えてくれている女将さんに腕を回してしがみついた。まるで幼子が母親に抱きつくみたいに。喚いてしまいそうになる声を抑えて、う～う～と呻くみたいな声を出し

て。子供の頃に戻ったみたいに何度もお母さんお母さん！　と心の中で叫んだ。

私と女将さんが少し落ち着いた頃に旦那さんがいつもの様に頭をポンポン撫でながらダイニングテーブルの椅子に促してくれる。目を向ければすでにレッスが座っていて、旦那さんに支えられた女将さんが腰を下ろそうとしている所だ。

私が出ている間にレッスが二人に話したのかと泣いた直後でぼんやりする頭で思った。

「まだ子供と言ってもいいシーダを、なんで、なんで、酷い仕打ちばかりっ！！」

「女将さん。いつも言ってますが私、２９といい歳なん」

「ああ、シーダ！　無理してまでこんな時まで冗談を言わなくてもいいんだよ！」

ぼんやりしていて、思った事をそのまま口に出してしまったものの、いつものように信じてもらえなかった。言い切らせてもくれない寂しさよ。多分、行動からすると旦那さんも私の年齢を冗談だと思っているだろう。少し恨めしい民族性だ。

ああこんな優しい子がっ！と隣の旦那さんの胸に埋もれて女将さんが泣きだして、旦那さんは悲しそうに女将さんの頭を撫でている。それを正直、羨ましいと感じた。

それから落ち着いた女将さんや旦那さん、空気になっていたレッスと「これから」について話し詰めた。はっきりいって此処を追い出されたら行く当て等ないわが身。だから女将さんから提案された隣街の知り合いの宿屋での仕事口は正直助かった。手紙を書いたからこれを渡しなさいと差し出された手紙を受け取った所で空気だっ

たレッスが口を開いた。

「俺も一緒にいくよ、イシーダ。まだ子供のような君を一人で行かせるのは心配だ」

お　前　も　か　！　彼にはきちんと自己紹介をしていたのにもかかわらず！！

この世界の人々は私が２９歳で子供を生んでいるという事実を認識する事が出来ないのだろうか？！

「いえ、大丈夫です」

名案だとばかりに頷き始めた女将夫婦に釘を刺すように即刻、ご遠慮申し上げた。レッスが僅かに眉を歪めたが彼が口を挟む前に提案を論破しなくていけない。

捜索隊を組む事が決まった後での前もって知らせていた訳でもない休暇、失敗の召喚に係わっていた兵士、しかも神殿から追い出した兵士だ。私の顔を知っている可能性の高い彼が捜索隊に組まれないわけがない。少しでも不審に繋がる可能性を作る事はできない。

そこからこの家族になんかしらの災厄が降りかかる事は絶対に避けたい事態だ。

少しだけある本音は、そろそろ地を出してしまいたい、というのもある。

私の態度は対人仕様だ。いくら家族の様に接してもらっていると いっても恩人に礼儀を欠くことは出来ない。だから違う街では少しは 「私」を出したいと思った。

本音を隠してこんこんと真っ当な事を述べ、心配してくれている

恩人を説き伏せていく。

そして夜が明けた。

一睡もしないまま。

私は日本人だ（後書き）

イシーダは地味に突っ込んでみた。

ミス！相手に突っ込みは効かなかった。

完徹の訳

もうね、三十路近い女には貫徹とか無理。若い頃はハイになって騒いで爆睡すればよかったんだけどこの歳になると気分はローな感じ。車の運転で言えば5速発進しちゃっていつまでも半クラのままでガタガタする感じ。ああすまん、今はオートマ限定が主流らしいね、すまんかったおばちゃんが悪かった。元気の前借したいから誰か栄養ドリンクをくれ！！

恩人を説き伏せた後、直ぐに自室に戻ってお出掛けの準備を完了させ、焦る心をそのままに乱雑にメニュー画面を開いた。ＭＰが回復してるのを確認して、Ｇにダイブした。

感想をいえば、チョコが非常に食べたい。特に一口チョコ。白と黒の二層のやつ。

まず、時間の流れが速いはずの私の世界。なのにこっちと時間経過が今は変わらない。

その証拠にスレがまだ残っていたのだ。正確にいえばｐａｒｔ３になっていたけど。私が抜けてからの流れを読み返すのに没頭した。通常だったらマジキチ扱いの書込み、でも今の私には惹かれて止まない。

『なんか異世界っぽい所に召喚されたんだけど、おまいら助けて』

その書込みの後しばらく沈黙していたが、数時間したら怒涛の流れが開始した。

読み進めれば進むほど私がレッスから聞いた勇者様と当てはまる。

そしてこの召喚された彼は何度も、何度も、私を呼んでいた。

『おい！＜＜１！！！スレ見てくれよ！！！！１！！お前ここにいんだろ？！！本当はいるんだよな？？？！いるっていってくれ！！！！』

悲痛な叫びとしかいえない彼の書込みは続いていた。私とは違う世界という可能性を否定したくて、したくて。私は知らずに泣いていた。深夜テンションパネェとか強がって目元を拭う。とても不純な涙だ、彼は絶望や孤独、不安に陥っているのに私は、嬉しくて、一人じゃないと安堵して、泣いたのだ。仲間が来た、と。日本から、常駐スレから、同じ境遇の。

『おい勇者様ｗｗｗよくも聖統括の屑野郎に自分の前に女が呼び出されていないかってききやがったな。あの屑、否って言ったろ！喜べ、おかげで私は消される事になったぞ』

軽い冗談みたいに書込む。こうする事で私は「いつも」を取り戻せる。内容はヘビーだけど。

＜＜１　キ・キ・キ・キタ━━━━━━（゜∀゜）━━━━━━！！！！

＜＜勇者！！勇者あああああああああ！！！！起きろ！起きるんだ勇者！！！！！

勇者！！！何してんだ！てか＜＜１！！どうしたんだ！ｋｗｓｋ！ｋｗｓｋ－－－－！

おお！　まさかキタ━（゜∀゜）━！　が自分にカキコされる日が来るとは思っていなかった。地味に嬉しい、テンション上がる。ｋｗｓｋの文字に窓に目を向ける。空は少し薄くなってきてる、朝

は近い。

『ごめん。夜が明け次第、逃亡イベント開始するからもうあんま時間ない。落ち着いたらｋｗｓｋに答えるよ。あと勇者様ｗｗ私の事を口にも態度にも出すなｗｗｗ私に死亡フラグ立ちまくるからｗｗ　あ、質問に答えよう、同じ世界にようこそ、勇者様』

書込み完了と同時にもう流れは見ないで、手を振った。ピッと音を聞いて、ゆっくりと長く息を吐きだした。さあ、始めようか。

小さいノックの音の後にレッスの声が私を呼んだ。荷物を背負って扉に手をかけ、開けた。

明けない夜はない。

完徹の訳（後書き）

もっと簡潔に進めたい。書いてからちょっと蛇足な話だったなと後悔。・・・勿体無い精神は大事だよね。

もしかして完徹って言葉はメジャーじゃないのかしら…？

徹夜明けはおかしいと言う事に気付かない

草原。平野。広大な世界。明るくなっていく空。ゲームでは心躍る初めてのフィールド。

そう、冒険の始まりだ。馬車なども通るのだろうか広く歩きやすい道で足を動かす。

『この道をまっすぐ行けばマシエドの街に着くからね』

隣街の名前。そんな名前だったのか。歩みを止め、今までお世話になっていた宿屋のある街？　国？　に振り返る。

そういえば此処はなんて名前だったんだろう。

レッスに説明されたはずなんだけど、全くと言っていいほど覚える気すらなかった。恨みこそすれ、愛着など到底湧かない。女将さん達がいる、その為だけにマシエドの街に着いたら少しだけ調べてみよう。それだけ考えてまた前を向いて歩きだす。

大人の足で昼位には着く近さらしい。らしいという表現なのは私は大人だが、ここの世界の大人とは体格が違う。散々子供扱いされるのもそのせいだ。奴らは揃って西洋体型、といえばいいのだろうか？　コンパスがまるで違うのである。自分の身長から割り出してみたら、女将さんは１７０?近く、旦那さんは女将さんから１０?位高い。レッスなど旦那さんより明らかに高かった。それに比べて１６０?に満たない自分である。

やめて！　私の首はもう瀕死よ！　何度声無く叫んだ事か……。

「一般人がみんなスタイル抜群、おまけに美形とかどんだけチー

トなんだ」

早速、最近覚えた単語を使い、ブツブツ呟きながら手に持つ棒を振り回した。

棒。宿屋から出る時に女将さんから渡された警棒みたいな真っ直ぐな一本の棒。

変な人や魔物が近付いてきたらこれで追い払いなさい、と女将さん愛用だという棒。握りの部分に布が巻かれた（使いこまれた痕跡有）、先端が丸く加工された打撃専用の棒。

どこからどう見ても、ひのきの棒です。本当にありがとうございます。

初武器がディーキュー5主人公初期装備とか、どんだけ。ありがとう、たぎります。

歩きながらメニュー画面を開けば、装備項目に激しく悶えた。

E　ひのきの棒
E　布の服

にやにやが止まらないのは徹夜テンションのせいである。そう納得させた。

歩けど道。道。お天道様が天辺にいらっしゃるのに街のまの字も現れない。木がちらほら生えていて少し先に林が見える位には風景は変化したのに。このままでは不味い。暗くなるのだけは頂けない。松明とか無いし。

こっちの世界に来てから半年近く、絶賛アナログ生活していたので体力は前より上がったと信じてペースアップの為、田舎で歩く速度から東京駅での歩行速度に切り換える。

…暇だ。

せかせか動かす足を余所に上はとても暇だ。
ここの世界に来てからゆっくりと考える事を放棄していた。生活の為と身体を動かして、くたくたになるまで宿屋を手伝い爆睡、を繰り返していただけ。還りたいと願うだけで手段さえ考えないで。暇に任せて少しだけ思案してみる。

屑共は救世主（勇者様）を欲しがって拉致をしていた。（過去形。勇者拉致成功させてるし）
魔王うんたらいっていたけど、宿屋にいた時に魔王とか魔物がとか私は聞いた事が無かった。テンプレじゃ、

魔王誕生→魔物超元気なる→人が襲われる　←イマココ

ではないんだろうか？
昨日のお客さん達だって、疲れた～とか腹減った～とか明るかった。ぶっちゃけ、これで幾多の魔物を屠った…的な使いこまれた武器とか見た事ないし。

現に今だって、一度も魔物なんて現れていない。

丸くて青い、ぴょんぴょん跳ねる魔物に会うのを少し期待していた私のやるせなさ。諦められなくて周りをキョロキョロ、道いなし、

平原いなし、林いな……

…い、や、え？　なんかいた。

黒くて、遠目に見ても……その、…すごく、おっきいです。
そうですよね。別にゲーム的始まりの町に居た訳じゃないですしね？　だからってだからって、これは反則じゃないですかね？

どう見てもドラゴンです。ありがとうございました。

走って逃げろと思うのに、好奇心に負けた。
向こうは気付いて無いのをいいことに、しばし、ガン見。視姦レベルでガン見。
一言で表すならファイファン５のバハムート、としか表せられない己の表現知識の無さよ。

「やばい。バハムートかっこいい、マジかっこいい」

思った事を素直にすんなり出てしまう自分を残念な人だと、今更感じる。
その声に反応してしまわれたのかバハムートさんの首がぐるんと動き、まんまドラゴンな顔が私に向いた。

（　。д　。）　コッチミンナ

コレだ！　私の心情を表すのに最も適した顔文字が浮かんだ。細部などよく見えないくらい遠い位置なのにバッチリ目が合った気がする。

なんという事でしょう。バハムートさんがゆっくり動き出しまし

た。なんていう死亡旗！　これはもうあれしかない。今、アレをしないでどうする。

「わっ私なんか食べても美味しくないですよーーーーー！！！」

逃走。最初どもったけど何とか捨て台詞も吐けた。逃げるが現実的判断です。道をダッシュで駆けて、息が苦しくなった時にちらりと振り返れば特に何も追ってきていない。

無事、逃げるは成功した。けど、そのまま私は走り続ける。

初エンカウント……、怖かった。

手が嫌な感じにベトつくのを感じながら、やっと小さく見えてきた街に少し安堵し、振り払えない恐怖をそのままに街の入り口を越えるまで私は足を止められなかった。

ボサボサで汗で顔にへばり付く髪、着崩れている服。命からがら逃げてきた様な格好を直さず、荒い息のまま宿屋を探す自分を思い出して、夜ベットの上でゴロゴロ暴れるはめになるのは、閑話休題。

知らない宿屋の扉をくぐり、今からやっと「私」として在る事が出来ると徹夜明け＆恐慌状態の最悪なコンディションで考えた名言に一人はしゃいだ。

まともな状態になってから思い返して、数十年単位で開く事の無かった黒歴史ノートにその迷言をそっと封印し。私の初イベント、逃走イベントが終了した。

徹夜なんてもうするもんか。そう心に決めて。

徹夜明けはおかしいと言う事に気付かない（後書き）

ディーキュー　＝ＤＱ（ドラクエ）
ファイファン　＝ＦＦ（エフエフ）
上記の表現は仕様でございます。

シリアスさんはログアウトしました。
そんな訳で徹夜明けでおかしいテンションに気付かないままなイシーダでお送りしました。

おかしいことにさえ、体が辛いことにさえ、年取ると気付かなくなる。そんな名言を聞いて最近実感しました。

本名が出て来ませんが彼女は石田弥生（イシダ ヤヨイ）さんです。こちらの世界では石田としか名乗ってません。（無駄情報）イシーダの本当の発音はイシィーダ。打ち込みが面倒とか思ってませごめんなさい思ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5131y/

おまいら助けてくれないか？ってスレ立ててみた

2011年11月20日11時20分発行